

2009年度は、薬剤師1名退職に伴い済生会熊本病院より中堅薬剤師1名が転属。2008年度と同様、薬剤師4名、事務員2名、計6名のスタッフでスタートした。薬局においては、2009年7月本格稼働となる電子カルテへの医薬品システムのスムーズな移行と、安全性を確保できるシステム構築を最重要課題に掲げ、運用面の確立、処方・注射入力支援をはじめ医薬品に関するあらゆる面でのリスク管理に努め活動した。また、電子カルテが宝の持ち腐れとならないよう各種機能を有効活用し、関連部署へのサポート体制を敷きながら大幅な業務効率化へ繋がるよう取り組んだ。

1. 電子カルテの有効活用

2009年3月外来内服オーダーリングをスタートに、7月の電子カルテ本格稼働まで、特に注射関連のシステム構築にかなりの労力と人力を費やした。時には、関連部署メンバー多数参集のもと、ぎりぎりまで激しい議論を交わし、安全面をより重要視した運用面等の検討を繰り返し、部分的な改善点はあったものの大きなトラブルもなく7月の電子カルテ稼働を迎えることができた。特に、注射実施に際してのセーフティー機能の導入は、現場での若干の手間は発生しているが、リスク軽減へ大きく寄与できているものとする。また、夜間・休日、薬剤師が不在時の対応についても、処方箋、薬袋、お薬説明書の現場（外来）でのプリントアウト機能など、従来よりも効率的なシステムを構築。その結果、看護師への間接的なサポートおよび患者サービスに寄与できたものとする。今後、電子カルテのもつ機能を最大限に引きだせるよう経験値を高め、薬局だけでなく病院全体の業務効率化に取り組んで行く。

2. 人材育成

電子化が進む中で、これまでは業務上コミュニケーションが必要であったものが、電子カルテ内で完結できるものが増えてきている。これは業務効率上好ましいことではあるが、医療人として本来重要で必要不可欠なコミュニケーションスキルが稀有になっていくことが懸念される。システム化され便利になっていく反面、医療人としての人を思いやる心が失われないよう、若手スタッフに対してはOJTを基本に薬剤師としての育成のみならず医療人としての育成にも力を注ぎ、他部門の職員や患者さんとのコミュニケーションスキルの向上に努めた。また、日常診療における患者満足度を向上すべく、薬剤師、事務員問わず患者さんへの気配りを心がけ、電子カルテ導入に伴う薬局における待ち時間短縮もあり、その結果、ある程度は満足できる評価を受けることができたと考えている。今後、電子カルテを情報収集の重要な手段としても有効活用し、患者さんへの服薬指導スキルのレベルアップに繋げていきたい。

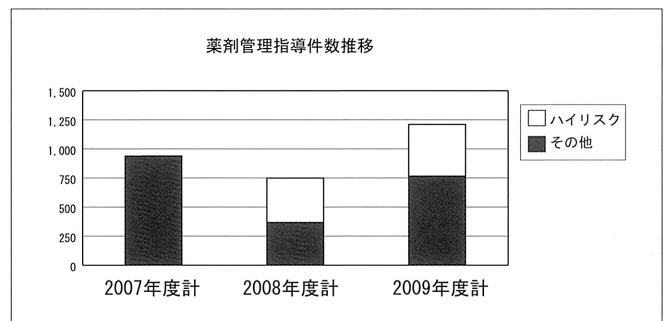
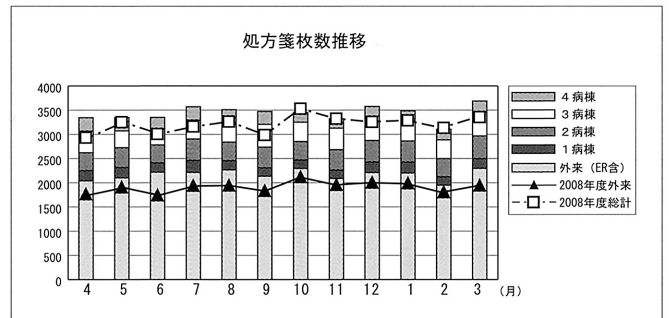
3. 外来対応

外来調剤は、2009年度も薬局の中心業務であった。その中で、電子カルテ導入による薬局における待ち時間削減は上述

したとおりであるが、医師の処方支援をはじめ、薬歴管理、禁忌薬管理、カルテ記録等々、一元化されたデータを効率良く活用し、患者さん本来の目的である病気の治療に少しでも貢献できるよう努めた。また、この高齢化地域ならではの、お薬の一包化調剤への要望にも拒否することなく、患者ニーズに応えるべく業務遂行し、事務員、薬剤師が連携をとり、接遇面のみならず積極的な声かけ、状況説明を行うことにより患者との信頼関係維持に努めた。

4. 入院対応

入院調剤については、外来調剤と同様、電子カルテの機能を存分に活用。従来の運用よりは遥かに改善されたものとなった。ただ、持参薬の管理・運用については、電子カルテにある既存の機能ではまだまだ不十分な点が多く、改善の余地が多いにあり今後の課題である。なお、兼務である病棟薬剤師の病棟における活動では、各薬剤師が限りある時間で効率よく動き、特に薬剤管理指導業務件数については当初の目標を継続達成することができ、評価できる働きであった。また、2009年度も各種回診（NST回診、ICT回診、緩和ケア回診等々）への高い参加率を維持することができ、求められているチーム医療に大いに貢献できたものとする。



2009年度は、電子カルテに始まり、電子カルテに終わった1年であった。2010年度はこの1年間の経験値を活かし、電子カルテを「使う」から「使いこなす」へと、リスク管理をはじめとする質の高い医療提供に大いに貢献できるよう薬局スタッフ一丸となって取り組んでいきたい。